

共に生きる ～私たちは何と共に生きるのか～

2021年3月12日
龍谷大学 玉木興慈

1. 新型コロナウイルス感染者

国内感染者 44万1869人

死者 8366人 (2021年3月10日)

- ・いつ収束（終息）するかわからない苛立ち、焦り、不安
 - ・「災難や危険を与えてくるもの」に対する敵意
⇒⇒⇒ウイルス？感染者？
 - ・「自粛警察」自粛要請に応じない店舗などに対する嫌がらせや落書き・通報
 - ・「コロナ警察」マスクをしない人などに対する過剰な批判
 - ・自粛に反するような生活行動に対する、常軌を逸した非難や批判、差別、偏見
- ※「人間の本质—新型コロナウイルス感染拡大から問われていること—」

真宗大谷派長願寺 海法龍

コロナが怖い！⇒⇒⇒同じように怖いものは？

コロナを解決したい！⇒⇒⇒コロナが解決しても、解決しないことは？

2. 親鸞聖人のお言葉

- ・9歳、養和元(1181)年に得度される前年
- ・59歳頃、寛喜3(1231)年
- ・87歳から88歳の正元元(1259)年・文応元(1260)年

『親鸞聖人御消息集』第16通、

なによりも、去年・今年、老少男女おほくのひとびとの、死にあひて候ふらんことこそ、あはれに候へ。ただし生死無常のことわり、くはしく如来の説きおかせおはしまして候ふうへは、おどろきおぼしめすべからず候ふ。まづ善信(親鸞)が身には、臨終の善悪をば申さず、信心決定のひとは、疑なければ正定聚に住することにて候ふなり。さればこそ愚痴無智の人も、をはりもめでたく候へ。如来の御はからひにて往生するよし、ひとびとに申され候ひける、すこしもたがはず候ふなり。

・・・・・・文応元年十一月十三日 善信〔八十八歳〕

【現代語訳】

なんといいても、去年から今年にかけて、老少男女多くの人びとが、あいついで亡くなりましたことは、悲しいことでもあります。しかしながら、人のいのちが無常である道理は、釈尊がくわしくお説きくださっているのですから、いまさら驚きになることはありません。

まず私自身は、臨終のさまの善し悪しを問題にはいたしません。信心が決定している人は、疑いのところがありませんから、往生が約束された正定聚の位に住すのです。そうですから、愚かな人も、無智の人も、臨終をめであつとまうことができるのであります。弥陀如来のお力によって往生するのだと、人びとに申されていますのは、私の信心と少しもちがってはいません。……

※霊山勝海『聖典セミナー 親鸞聖人御消息』本願寺出版社、2006年、105頁

3. 蓮如上人のお言葉

『御文章』第4帖第9通

当時このごろ、ことのほかに疫癘とてひと死去す。これさらに疫癘によりてはじめて死するにはあらず。生れはじめしよりして定まれる定業なり。さのみふかくおどろくまじきことなり。しかれども、今の時分にあたりて死去するときは、さもありぬべきやうにみなひとおもへり。これまことに道理ぞかし。このゆゑに阿弥陀如来の仰せられけるやうは、「末代の凡夫罪業のわれらたらんもの、罪はいかほどふかくとも、われを一心にたのまん衆生をば、かならずすくふべし」と仰せられたり。……[延徳四年六月 日]

【現代語訳】

このところ、はなはだ多くの人びとが伝染病のために死亡しています。これはしかし、決して伝染病によつてはじめて死んでいるわけではありません。これは生まれたときから定まっていることなのです。ですから、さほど驚くようなことはありません。

けれども、今のようなきにあたって死亡すれば、「これは伝染病によつて死んだにちがいない」と、人は思うものです。これもまことに、なるほどと思われます。

こういうわけですから、阿弥陀如来は、「末世の愚かで罪ばかりを作っている者たちの、その罪がどれほど深くても、わたしにあたごころなくまかせるならば、かならず救おう」とおっしゃったのです。……(1492年6月)

※『蓮如の手紙 お文・ご文章 現代語訳』浅井成海、国書刊行会、1997年、122頁

4. 21世紀の人類の課題

「人間と自然の共生」
「他民族・多文化の共生」
「障がい者との共生」
「男女の共生」
「after コロナ」
「with コロナ」



椎尾弁匡（1876～1971）の共生運動

5. 仏典における共生～「共に往生する」と「共に生きる」～

善導大師（613～681）『往生礼讃偈』

弥陀智願海 深広無涯底
聞名欲往生 皆悉到彼国
願^共諸衆生 往^生安樂国

弥陀の智願海は、深広にして涯底なし。

名を聞いて往生せんと欲すれば、みなことごとくかの国に到る。

願はくはもろもろの衆生とともに、安樂国に往生せん。

（『浄土真宗聖典 七祖篇（註釈版）』671頁）。

天親菩薩（5世紀頃）『無量寿経優婆提舍願生偈』

願見弥陀仏 普^共諸衆生 往^生安樂国

願はくは弥陀仏を見たてまつり、あまねくもろもろの衆生とともに、安樂国に往生せん（『浄土真宗聖典 七祖篇（註釈版）』32頁）。

源信和尚（942～1017）『往生要集』

^共生極樂成仏道

共に極樂に生じて仏道を成ぜん（『浄土真宗聖典 七祖篇（註釈版）』906頁）。

6. 縁起と共生

「すべての存在は縁って起こっているものであり、すべての存在は相互に支えあっている。それだけで独立自存する実体的なものはない。」

- ・長谷川岳史『^{ともいき}共生と^{きようせい}共生と^{ぐうしやう}共生』（『りゅうこくブックス』120号、2007年）
「お互いに世の中というのは、関係性で成り立っているのだ」と言う、ここま

ではいいかも知れませんが、そこに価値をにおわせる。つまり「支えられて生きていくんだ」ということで、無条件に善である批判できない何かを感じさせるという無責任な言い回しや説明が非常に多い。・・・我々は支え合って生きていくんだ。一人として自分自身だけで生きていけるものはないんだ」というのが「縁起」だ、と解釈される傾向がある。

・紀平英作編『グローバル化時代の人文学—対話と寛容の知を求めて—〈下 共生への問い〉』京都大学学術出版会、2007年

「理論的課題」としては首肯することができるが、「行動的課題」としてはいささか首肯しがたい面が残る。

・大柳満之編著『仏教の共生思想と科学技術』丸善株式会社、2009年、10～11頁
「生き物との共生」が本当に成り立つのかどうか、はなはだ疑問に思うのである。・・・「自然との共生」とは、多少の自然破壊を許容する人の価値観のもとでしか実現しないのである。

7. 親鸞聖人における共生

『歎異抄』第5条（『浄土真宗聖典 註釈版』834頁）

一切の有情はみなもつて世々^{せせ}生々^{しょうじょう}の父母・兄弟なり。

『親鸞聖人御消息集』第2通（『註釈版』740頁）

この御なかのひとびとも、少々はあしきさまなることのきこえ候ふめり。師をそしり、善知識をかるしめ、同行をもあなづりなんどしあはせたまふよしきき候ふこそ、あさましく候へ。すでに謗法のひとなり、五逆のひとなり。なれむつぶべからず。『浄土論』と申すふみには、「かやうのひとは仏法信ずるところのなきより、このころはおこるなり」（意）と候ふめり。また至誠心のなかには、「かやうに悪をこのまんにはつつしんでとほざかれ、ちかづくべからず」（散善義・意）とこそ説かれて候へ。善知識・同行にはしたしみちかづけとこそ説きおかれて候へ。

※ある掲示板の言葉

人のいのちを造ってくれる食べ物
その食べ物にも生命はあった
提供してくれたいのちに一言
「ごめんなさい」と合掌



※中村桂子『生命科学者ノート』岩波現代文庫、2000年

※木村清孝「共生と縁成」(『仏教における共生の思想』平楽寺書店、1999年)

「共生」(living together)

「争生」(living in battle)・・・自然を利用・破壊し、生物の生命を奪い、同じ民族・部族内で争い、他の民族・部族と戦争を繰り返す。

しょうぞうまつわさん
正像末和讃

しょうじしやうひ しょうじしやうひ しょうじしやうひ
小慈小悲もなき身にて 有情利益はおもふまじ

がんせん ぐかい
如来の願船いまさずは 苦海をいかでかわたるべき (『註釈版』617頁)

8. 今、「共に生きる」を考えるなら・・・

- ・コロナ禍に顕わになる、人間の本性。煩惱具足の凡夫。
- ・コロナが解決しても、解決しなければならない問題がある。

これを解決してくれるのが、仏法。

「死の縁無量」

「老少不定」

「朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身」

《資料》

梅原真隆 (1885年～1966)『宗教に生きる』宝文館出版、1965年

この世に完全な人間はひとりもありません、この世はおたがいに行届かない凡夫の寄合いであります、聖徳太子は「共にこれ凡夫のみ」とさとされました。私どもの言行をふりかえてみると落度ばかりであります。私どもの気づかないところに、どれだけおおくの過失と罪悪があることでしょう。おそろしいことです。すみませんと詫び申しわけないとあやまりはてるより外はありません。

とりわけて仏とともに生かされていく生活には、この懺悔しなくてはならないことが、いよいよ夥しく見出されてくるのであります。宗教に関心のすくないものの生活では、人間が万物の尺度となっており、もしくは自分というものが一切の基準に擬せられているために人間そのものの罪過は不問に附せられ、さらに人間の過失を見出してもそれは相互のならわしであると許容されがちであります。そこで弁解をしたり、^{あやまち}過を文ったり、^{かざ}ひどいのになると罪過を他人になすりつけて、自分のはのんびりと生きてゆく傾向もみうけられます。けれども宗教の境地にわけいると法界が展開されてきます、仏が万物の尺度となり法が一切の基準となります。(87頁)

石田充之 (1911～1991)「親鸞聖人の人間観」『光華会宗教研究論集一親鸞と人間一』

永田文昌堂、1983年、11頁

草木も人も羊も深い関わり合いをもって生きておるものであるが、それにも拘わらず、現実には互に相喰う・・・互いに関わり合っているものは相互に生かし合い、

生かされ合うことで、愛情深く、平和に、なごやかに生きてゆけたならば、この上ないことであろうが、相互に、その生命を維持されてゆくほど深く関わり合いものほどが、現実においては相喰らい、殺し合わねば生きてゆけない、という矛盾というか、深い絶望的な深淵に臨まされていることを説かれている。

盛永宗興（1925～1995）『見よ見よ一若き人びとへー』禅文化研究所、1994年

今、雛壇にならんでいる新郎新婦は、お互いに対する愛情に、あふれんばかりだろう。そして、お互いに、相手のために役立ちたいと、ひたすら願っていることと思う。しかし、はっきり言わせてもらうなら、あわてて相手のために役立とうとすることよりも、相手の邪魔にならないようにしようとする心遣いの方を深く持ってもらいたい。愛が重荷である場合がある。役立とうとしてくれることが邪魔になる場合がある。若いときには、なかなかそのことに気がつかないけれども、しかしお互いに長く支え合って行こうと思うならば、相手に役立つことよりも、相手の重荷にならないようにしようとする努力のほうを続けてもらいたい。（291頁）

大谷光真『愚の力』文春新書、2009年

「一切衆生なのだから」という生き方と、「一切衆生なのだけれども」という生き方がある。可能な部分と不可能な部分、両方がある。人間として生きていく以上、すべて一切衆生というわけにはいきません。あらゆるいのちを完全に平等に扱っていたら生きていけない。しかし、「一切衆生なのだけれど、自分にはここまでしかできない」という考え、考えというより感じ方が節度を生み出していくのです。（52頁）

譬えていえば、カーテンを閉めているときには暗くて気づかなかったほこりに、カーテンを開けて日の光によって気づかされるようなものです。

いくら探し求めても、自分一人の力だけでは気づくのは難しい。気づくというよりも、気づかされる。この「受動態である」という点が大事です。反対方向から見れば、気づかしめるという「使役動詞である」ということが大事です。（89頁）

※報恩講の歌

和歌の浦曲の片男波の よせかけよせかけ帰るとく

われ世に繁く通いきたり みほとけの慈悲つたえなまし

一人いてしも 喜びなば 二人と思え

二人にして 喜ぶおりは 三人なるぞ その一人こそ 親鸞なれ

ごりんまつのごしよ
御臨末御書

われとし あんようじやうど ぐえんき
我歳きはまりて安養浄土へ還帰すといへども

わ か うら かた お なみ かへら
和歌の浦の片雄浪のよせかけよせかけ帰んに同じ。

いちにん あ よろこ ににん
一人居て喜はゞ二人とおもふべし、

二人寄り さんになん しんらん
二人寄て喜はゞ三人と思ふべし、その一人は親鸞なり。

